

ワークショップによる高校生たちの公共施設建設計画への参画と学習

— 福島市における「子供の夢を育む施設」建設計画を事例に —

福島大学行政社会学部 今 西 一 男

目 次

- 1 はじめに
 - 1.1. 研究の背景と目的
 - 1.2. 研究の構成と方法
 - 2 「子供の夢を育む施設」建設計画とワークショップ「高校生フォーラム」の位置
 - 2.1. 「子供の夢を育む施設」建設計画の概要
 - 2.2. ワークショップ「高校生フォーラム」の位置
 - 2.3. 企画から実践へ至るプロセス
 - 3 ワークショップによる高校生たちの参画と学習
 - 3.1. 「高校生アンケート」の概要
 - 3.2. ワークショップによる高校生の生活実態把握
 - 3.3. ワークショップによる高校生の意見集約
 - 4 高校生たちが学習したことと建設計画
 - 4.1. 高校生たちの感想に見る学習効果
 - 4.2. 建設計画への意見の反映
 - 5 ワークショップの評価とその公共施設建設計画への適用の可能性
 - 5.1. ワークショップが参画と学習に果たした役割
 - 5.2. 空間創造主体形成への可能性
 - 6 おわりに
- 謝辞
補注
引用文献

1 はじめに

1.1. 研究の背景と目的

本稿の目的は行政が行う生活基盤としての公共施設建設計画に対する、その主体としての住民「参画」を実現する方法の一つを検討することにある。ここで言う住民参画とは、行政による公共施設の「供給」計画への「参加」という視点を意味しない。住民がその建設と完成以後の維持・管理をも含めた計画立案を行う

という視点に立つ。すなわち公共施設建設計画をめぐる、住民が都市空間・生活空間「創造」の主体として獲得すべき意識・態度の学習も含意した住民参画の方法を検討する。

そのため、わが国での公共施設建設計画に関連する論点を概観しよう。1960年代、西山¹⁾は「都市は人間の生活の場であり、それは生活空間として認識されねばならない。生活空間とは、人間の行動のスケールに適し、快適な環境と文化的な空気をもつ、実感としての空間でもある。」とした。だが、そうした都市政策に関わる計画立案過程には住民参画が欠如しており、結果として住民の生活改善に対する実感とかけ離れた計画が策定されていることも指摘した。つまり人口・経済等の動向を根拠に必要とされる空間容量を導出し、それを自治体総合計画や都市計画などをとおして住民にあてがうことが、行政の役割であった。

こうした都市空間・生活空間創造の課題に対し、松下²⁾はいち早く地域社会における市民生活の公準＝シビル・ミニマムの空間へのシステム化を提起した。松下は地域社会をヨコ（地域社会相互）にもタテ（生活空間の重層性）にも開放された生活空間として規定した後、それは「市民によって自由に選択され、また市民が創意をもってつくりだす空間でなければならない」とした。とりわけ生活空間としての市民施設（公共施設）を「物的施設というよりも、市民相互の交流・対話のチャンスとしての出会いの密度を高めるための公共空間」と位置づけた。

以上の行政による公共施設の供給か、あるいは住民参画による空間の創造か、という論点は現代まで引き継がれてきた古くて新しい課題である。しかし、少子高齢化や経済成長の停滞は、公共施設建設を含めた都市政策に大きな転換を迫っている。例えば『平成11年版 建設白書』³⁾は、今後の都市政策の基本方向は「整備追求型」から「課題解決型」への転換であり、すなわち都市を「作る時代」から「使う時代」への転換と

位置づけた。さらに「従来の都市づくりは器としての施設整備を重視し、器の中味である機能や器を囲む環境の視点が不明確であった」と、それまでの都市政策のあり方を喝破した。つまり、いまやわが国の都市政策としても、都市空間・生活空間創造の主体として住民を位置づけようとしつつある。

しかし西山が指摘するように、住民にとって実感のある計画立案過程への参画の実現は、まだ制度だけではなく方法の充実という課題を残している。また、松下が言うシビル・ミニマムの空間へのシステム化という課題は、その主体相互の合意形成の困難という問題を解決していない。それだけに公共施設建設計画という具体的な空間創造についても、住民の意識・態度の学習という実践課題をふまえて、住民参画を実現する方法をなお検討していく必要がある。

そこで本稿では公共施設建設計画でも近年多用されている、ワークショップにより住民参画を実現する方法について検討する。わが国におけるワークショップの動向を提示した中野⁴⁾は「まちづくり」ワークショップの事例が最も多いとしつつ、その成果がどのように活用されるのかが見えづらいこと、そもそも単発的に実践されるワークショップから重要な行政計画を立案することには無理があることを指摘している。

しかし、従来の住民参画が公聴会・説明会等の「聴きおく」内容にとどまってきたことを対置すれば、ワークショップにより住民参画を実現する方法の検討は、なお住民による空間創造の可能性を持つものと考ええる。特に本稿では事例研究で扱うワークショップの、(1)学習効果、(2)公共施設建設計画への反映、という二つの実践課題について検討を行い、この方法の空間創造に対する可能性を評価するものである。

1.2. 研究の構成と方法

本稿の事例は、2001年7月に福島市で行われた「建築とチャレンジ講座 PART.2 子供の居場所—子供の夢を育む施設によせて—高校生フォーラム」の実践である¹⁾。その概要は2において提示するが、取り扱う具体的な課題はタイトルにもある福島市の「子供の夢を育む施設」（仮称）建設計画に対し、その主体となる高校生たちの生活実態を把握・反映させ、さらに施設に対する意見集約を実施することにあつた。そしてそのワークショップをとおして高校生たちに、完成後の維持・管理をも含めた施設に対する意識・態度の学習を期待することも主要な課題であつた。以上の

課題に対し、ワークショップは高校生たちのこの施設建設計画への参画と学習のための有効な方法として実践されたのかということを評価する。

このため本稿では、まず2においてこの施設建設計画の概要、それに対するワークショップの位置と企画の概要について説明する。その後、3においてワークショップのプログラムを構成した高校生の生活実態把握の結果、高校生の意見集約の結果、の2点について整理する。また、そのために、ワークショップの事前にプログラムの一環として実施された15高校・1800人を対象とする調査票調査「高校生アンケート」の結果概要についても簡単に紹介することとする。

以上のプログラムをふまえ、4では高校生たちがワークショップをとおして獲得した感想を取り上げ、その学習効果について検討する。また、施設建設計画へのこのワークショップの結果の反映については、福島市建築課への聞き取り調査により提示する。そして5においてこのワークショップが参加と学習に果たした役割と今後の可能性について整理する。

筆者はこのワークショップの企画段階から実践に関与した。特にワークショップではファシリテーターとしてその運営にあたつた。したがって事例研究は社会調査方法で言うところの参与観察法¹²⁾による。

本稿に関係する既存研究では、可児市文化センター建設計画の研究会方式による設計プロセスを検討した龍ら⁵⁾、札幌市での小学生たちの「こどもまちかど解決隊」の活動をとおした「まちづくり」の促進事例にを検討した倉原ら⁶⁾がある。既存研究をふまえた本稿の意義は、公共施設建設計画への参画と学習の両面を検討すること、総合学習などの学校教育とは離れた場面で高校生を対象として取り上げることにある。

2 「子供の夢を育む施設」建設計画とワークショップ「高校生フォーラム」の位置

2.1. 「子供の夢を育む施設」建設計画の概要

本稿で取り上げるワークショップ、高校生フォーラムの実践は、福島市による子供の夢を育む施設建設計画に端を発する。福島市には拠点となる児童施設として「児童文化センター」が既存だが、この建て替えが課題であつた。同時に現代社会における子供をめぐる状況変化に対応しうる施設の確保が要請されていた。つまり、核家族化と少子化、遊びの変化、科学ばなれ、居場所の確保、等への対応である。そこで福島市では

既存の児童文化センターとは異なる位置となるJR福島駅東口付近に約8,000㎡の用地を確保、NHKとのいわゆる合築³¹⁾によりこの施設を建設することを計画した（福島市5,000㎡・NHK2,987.17㎡）。

この施設建設に対し福島市は、児童文化センターの機能を取り込みつつ、多機能・高機能を有する複合文化施設とすることを基本方針としている。だが従来のあてがうという性格の児童施設ではなく、自主的・自立的な出会い・体験をととして成長する空間としてこの施設を位置づけることも基本方針とした。そして小学生という児童だけではなく、中学生・高校生も施設の利用主体として位置づけることとした。

以上の基本方針をふまえ、福島市は2000年度に基本調査を実施、2001年度に基本構想をまとめた。以降、2001年度以内に基本設計、2002年度に実施設計、2003～2004年度に施工・完成、2005年度に開館という事業スケジュールを計画している。その基本構想として明示されている施設概要は表－1に示される³²⁾。

表－1 子供の夢を育む施設概要（基本構想）

施設名称：	子供の夢を育む施設（仮称）
テーマ：	子供に夢を 青年に希望を お年寄りにやすらぎを
目的：	児童・生徒の情操の涵養及び科学する心や知識及び芸術文化の向上等
基本方針：	児童文化センターをその機能の一部として取り込み、多機能・高機能を有する複合文化施設をNHKと一体的に整備する。もって、新たな情報文化発信ゾーンを形成し、中心市街地の活性化に資する。
施設構成：	・多目的ホール（300席程度） ・遊びの空間（運動スペース、遊びスペース等） ・学びの空間（科学ゾーン、図書ゾーン等） ・ふれあい空間（ロビー、クッキングスタジオ等） ・管理部門
建設：	・敷地面積 5,000㎡ ・用途地域 近隣商業地域（建蔽率80％・容積率300％） ・建築面積8,000～10,000㎡
運営方針：	・施設ボランティアの活用 ・運営委員会の設置 等

2.2. ワークショップ「高校生フォーラム」の位置

以上の子供の夢を育む施設の基本構想は、従来のあてがうという性格の児童施設から、いくつかの転換を

試みている。特に2.1.に記述したように、子供の自主的・自立的な成長のための空間としてこの施設を位置づけたことは注目される。そして、それを実現するための施設の運営方針として「施設ボランティアの活用」「運営委員会の設置」等の、完成以後の維持・管理にまで踏み込んだ基本構想が用意された。

しかし、この建設計画が行政から住民に対して一方的に提示されるようであれば、基本構想の理念が実現されるとは言い難い。つまり住民参画を必要とする基本方針をうたうのであれば、その実現をも住民参画により図る必要がある。こうした住民参画への意向は基本構想の提示以降、福島市において活動する住民団体等からも発言が行われるようになっていた。

そうした団体の一つとして、福島県建築士会福島支部女性員会（以下「女性委員会」）はこの建設計画に対し、施設と関係する主体であるべき高校生の意見を反映させようとした。女性委員会では、高校生の意見を反映させた施設建設を行うことが、後々の福島市の文化形成につながるという展望を持っていた。こうしたねらいから女性員会では2001年10月、福島市に対して建設計画への「提言」を提出するが、それをまとめるために高校生の生活実態把握及び意見集約を行うことを企画した。その企画として実施されたワークショップが高校生フォーラムである。

高校生フォーラムでは施設に対する意見集約にあわせて、施設建設が予定されているJR福島駅東口付近という中心市街地に対する意見集約も行うこととした。これにより中心市街地という地域との関係のなかで施設の位置づけをとらえさせることを意図した。そして意見集約全般をととして、高校生たちが自分自身の意見による空間創造に向けた学習を行うということも、このワークショップのもう一つのねらいとした。

以上の女性委員会の提言に向けたワークショップ実施の動向は、福島市にも認知され行われるところとなった。福島市では基本構想の実現のために、つまりこの施設を市民の共有財産とするために、高校生とのコミュニケーションを図ろうとしていた。したがってこのようなかたちで提言がまとめられることは、福島市にとっても期待される場所であった。ワークショップでは福島市職員が基本構想について概要を説明するなど、運営協力も行われた。

2.3. 企画から実践へ至るプロセス

女性委員会のねらいを具体化するために、高校生フ

ォーラムを含めた一連の企画が立案された。筆者は高校生フォーラム関係を中心に、その実践に至るプロセスでの企画会議で発言を行った。この企画会議を含めた実践に至るプロセスは表-2に示される。

表-2 高校生フォーラムの実践に至るプロセス

2001年6月11日	高校生アンケート配布 女性委員会による調査票配布
2001年6月15日	高校生アンケート回収 女性委員会による調査票回収
2001年6月20日	企画会議 一連の企画の趣旨説明・確認 企画進捗状況説明・確認 類似施設調査について 高校生フォーラム参加者確保について 高校生フォーラムの内容について
2001年7月3日	企画会議 企画進捗状況説明・確認 施設基本構想の確認 類似施設調査結果の概要 高校生フォーラム参加者確保について 高校生フォーラムの内容について（詳細）
2001年7月7日	高校生フォーラム

このプロセスでは、まず高校生の生活実態把握に関係する議論が行われた。その背景には建設計画に対する意見集約だけではなく、高校生の生活実態からもこの施設構成等を検討しようという意図があった。そのため女性員会では高校生ワークショップ以前に、3.1.で紹介する高校生アンケートを実施した。

一方、高校生フォーラムについては、ワークショップの内容構成を中心に議論を行った。まず生活実態把握の内容としては、高校生フォーラムまでに高校生アンケートの一定の集計・分析を行い、その結果を反映させることを確認していた。だが、やはり高校生との直接の対話の機会であることを意識した内容を用意しようとした。そこで「自分の一週間を見つめてみよう」と題した行動把握のプログラムを取り入れた。このプログラムでは自己申告により放課後・休日の行動を確認・発表することから、高校生の居場所と施設との関係を考えようとするものである。

そして施設に対する意見集約のためのプログラムとしては、「こんな施設があったらいいな」「こんなふう運営・利用しよう」と題したグループ討論による意見集約を行うこととした。この2題ごとに討論・発表を行うという内容構成にした。ただしこの実践段階で

は、まだこの施設が計画段階にあることから、高校生たちにまず施設に対するイメージを獲得してもらうよう配慮した。企画会議で基本構想の内容を確認しスタッフの共通認識を形成しておくと同時に、スライドで類似施設の紹介を行う等の内容を用意した。

以上の企画会議での議論・作業をふまえて、ワークショップのプログラムは表-3のように構成した。

表-3 高校生フォーラムのプログラム

日時：2001年7月7日 14：00～16：30（2時間30分）
場所：ユニックスビル9階第2会議室 （福島市栄町6-6）
内容：
14：00 開会・主催者挨拶・日程説明
14：10 第1部 「子供の夢を育む施設」とは？
（1）施設の計画概要
（2）高校生アンケート集計・分析結果発表
（3）自分の一週間を見つめてみよう
15：00 休憩
15：10 第2部 意見交換
（1）類似施設の紹介
（2）グループ討論
（3）発表
16：20 まとめ・感想記入
16：30 閉会

また参加者確保は、通学の際にJR福島駅を利用する圏内にある高等学校を対象として、該当する高等学校に依頼を行った。その結果、表-4に示す21名が希望あるいは高等学校の推薦により決定された。

表-4 高校生フォーラムの参加者

グループ	合計人数	内訳（性別・学年・所属高等学校）
A	6	(男・4・二), (男・3・ハ), (男・2・イ), (女・3・ホ), (女・3・ホ), (女・2・ハ)
B	5	(男・3・ハ), (男・1・イ), (女・3・ホ), (女・2・ハ), (女・1・ロ)
C	5	(男・2・イ), (男・2・ハ), (男・1・イ), (女・3・ホ), (女・1・ロ)
D	5	(男・3・ハ), (男・2・イ), (男・2・ハ), (女・3・ハ), (女・3・ホ)

(注) 所属高等学校イ＝公立普通科, ロ＝公立普通科, ハ＝公立工業科, ニ＝公立定時制普通科, ホ＝私立普通科

3 ワークショップによる高校生たちの参画と学習

3.1. 「高校生アンケート」の概要

表-3のように、高校生ワークショップでは高校生たちの生活実態把握を行った。その目的には高校生の生活実態からもこの施設構成等を検討しようという意図があったが、高校生ワークショップではその把握を参加者から行う前に、先に実施した高校生アンケートの集計・分析結果発表を行った。これにより、プログラムの一つである「自分の一週間を見つめてみよう」ととりくむための共通認識を形成しようとした。本稿でもこの高校生アンケートの集計・分析結果から、特にこの施設の建設計画に関係する事項を紹介しよう。

この高校生アンケートは女性委員会が2001年6月11日配布・同15日回収というスケジュールで実施した調査票調査である。調査対象は高校生ワークショップの参加者確保と同様に、通学の際にJR福島駅を利用する圏内にある高等学校とした。具体的には福島県県北地区15高校の各学年1クラス（工業科建築系学科は全クラス）の1,800名を調査対象とした。配布・回収は調査対象としたクラスのホームルーム等の時間などにおいて、各高等学校の協力により実施した。

質問項目としては通学手段、JR福島駅の利用頻度、等の属性・特性項目をはじめ、中心市街地との関係や希望する施設イメージなどを聞いている。そのなかから、図-1は「通学以外で福島駅周辺を歩く理由は何ですか」という質問への回答結果である（複数回答）。

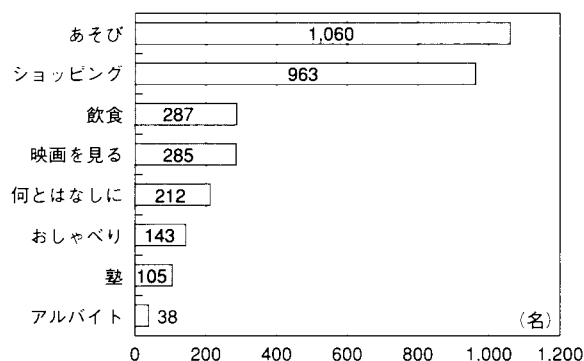


図-1 通学以外で福島駅周辺を歩く理由

図-1を見ると「あそび」(1,060名)、「ショッピング」(963名)が特に多いことがわかる。「あそび」の内容等については把握を行っていないが、「何とはなしに」(212名)の5倍の回答となっていることも考慮

すると、高校生たちが目的的に中心市街地を訪れている状況も推測される。

調査対象を1,800名としたことをふまえると、図-1は複数回答とは言え、多くの高校生たちが中心市街地を訪れていることも示している。しかし高校生たちの中心市街地を訪れる目的を充足する施設が整備されているのであろうか。この点は建設計画に対する重要な唆を与えよう。このため高校生アンケートでは図-2に示すように、「こんな施設だったらいいのになあと思う内容」という質問も行った（複数回答）。

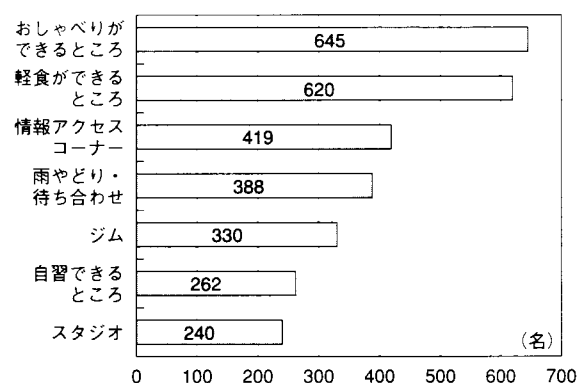


図-2 こんな施設だったらいいのになあと思う内容

図-2を見ると第1位は「おしゃべりができるところ」(645名)であった。図-1で「おしゃべり」(143名)が第6位と低い順位であったことと合致し、高校生たちは「おしゃべり」ができるといったような、いわばたむろすることができるところを求めていることがわかる。以下、第2位は「軽食ができるところ」(620名)、第3位は「情報アクセスコーナー」(419名)となった。なかにはすでに中心市街地にある施設もあるが、その利用対象として高校生を想定していなかったことも、この結果は示しているように思われる。

3.2. ワークショップによる高校生の生活実態把握

この高校生アンケートの集計・分析結果を確認した後、高校生ワークショップのプログラムを実施した。その第1部で実施したプログラムが「自分の一週間を見つめてみよう」である。このプログラムでは図-3に示す「いつ・どこで・だれと・なにをしている?」を自己申告する用紙への記入を行った。その際には参加者どうしで自由に話し合い、ファシリテーターも話し合いを促進することに努め記入することとした。なお、この話し合いの状況は写真-1に示される。

名 前 (自己紹介をかねて…)			
あなたの一週間の行動を思い出し、書き出してみよう!			
いつ	どこで	だれと	なにをしている?
放課後			
休 日			

図-3 「自分の一週間を見つめてみよう」用紙

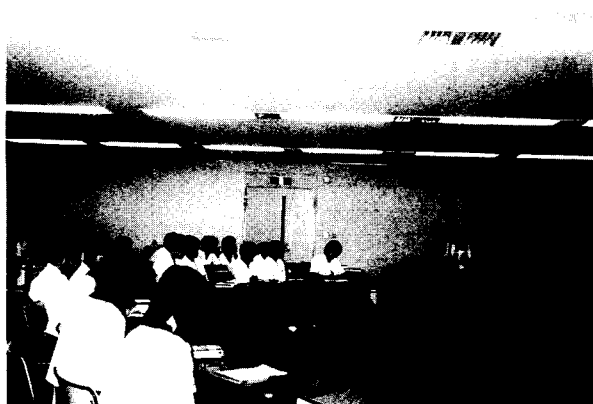


写真-1 「自分の一週間を見つめてみよう」の様子

この結果の例は表-5に示される。ここでは学年・性別ごとに1例ずつを示した。概観するとワークショップの参加者に限定されるが、男子には部活・生徒会等により放課後・休日ともに学校に関係する場所で生活している実態が多いことがわかった。例えば3年男子・2年男子のような回答が他の男子6名からも得ら

れた。なかには「学校」で「友だち」と「資格試験の講習を受講している」といった回答もあった。

一方、女子には放課後・休日とも学校以外の場所で生活している実態が多いことがわかった。3年女子・2年女子のように放課後には「お店」「ゲームセンター」「バイト先」で、休日には「家」「友だちの家」で生活している実態が他の女子4名からも得られた。

こうした高校生の生活実態把握を建設計画に反映するための資料として見れば、それぞれに有用な結果を示しているものとする。その検討は4でも取り上げるが、高校生たちが学校に生活の場所を持ちながらも、一方で福島駅周辺なども様々な行動の場所としている生活実態が表-5からもわかる。2年男子からは休日を「学習センター」で生活しているとの回答が得られたが、他にも「保健センター」などの場所をあげている回答があった。高校生の生活実態と公共施設との関係を見るための資料を得るという意味でも、このプログラムの目的は達成されたと言える。

3.3. ワークショップによる高校生の意見集約

高校生たちの生活実態把握をふまえて、高校生フォーラムの第2部では表-4にも示した四つのグループごとに、2.3.に示した二つのテーマに即して、この施設に対する討論・意見集約を行った。

この二つのテーマに即した話し合いでは、それぞれのグループごとのテーブルにスタッフ2名程度を配置することとし、討論の促進だけではなく建設計画に対する質問などに適宜、回答することとした。ファシリテーターはフロア全体の話し合いの促進に配慮すると

表-5 「自分の一週間を見つめてみよう」結果の例

あなたは	放 課 後			休 日		
	どこで	だれと	なにをしている?	どこで	だれと	なにをしている?
3年男子	学校	部活仲間	部活 (サッカー)	試合会場	部活仲間	サッカー
3年女子	お店 ゲームセンター	友だち	ぶらついている プリクラ	家	一人	寝ている
2年男子	学校 (生徒会室)	生徒会仲間	話し合い	学習センター	生徒会仲間	話し合い
2年女子	バイト先	友だち	バイト	友だちの家	友だち 家族	ビデオを見る 犬と遊ぶ
1年男子	家の周辺 福島駅周辺	友だち	スケボー ぶらついている	福島駅周辺	友だち	買い物
1年女子	学校	部活仲間	部活 (絵を描く)	家	一人	くつろいでいる

同時に、タイムキープなど運営の役割を担った。

グループ討論では、まず与えられたテーマについて参加者各自が自由に発言をするようにした。その発言をふまえて、グループごとの意見として集約するように参加者には要求した。極力、スタッフが意見をまとめてしまわないよう配慮し、まとめに至る討論までを参加者に委ねることを原則とした。そのようにしてまとめられた意見はテーマごとの用紙に記入し、フロア全体に見えるように掲示した。ファシリテーターはその意見用紙をもとに、テーマに即してまとめを行った。このフロアの様子は写真-2に示される。そして各グループで集約された意見の骨子は表-6に整理される。

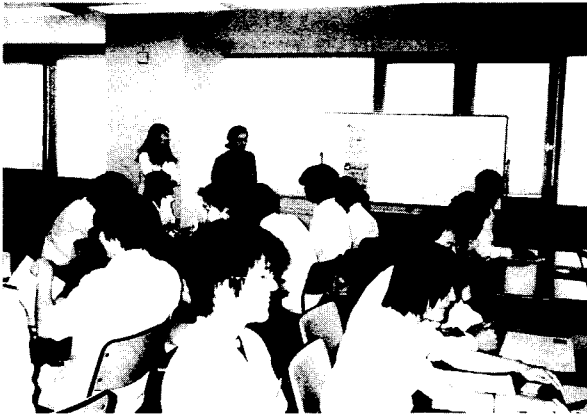


写真-2 グループ討論の様子

まず「こんな施設があったらいいな」では、実現を期待する具体的な施設について討論を行い、各グループ第3位まで意見を順位づけした。横断的に見ると、「自由にできる空間」(A)、「広場」(B)、「広くて干渉されないスペース」(C)、「自由な空間」(D)と特

に目的を定めない空間を期待する意見が共通して示された。個々には、Aグループでは「図書室ほど規制がなく、少々話をしながら調べものをするくらいの本があって、勉強できるところ。」、Bグループでは「腰をかけてゆっくりおしゃべりができるところ」、Cグループでは「年齢やそのスペースで行う内容によって、自由にブースを区切られるようにする。」、Dグループでは「友だちと楽しくおしゃべりしたり、ぼーっとしたり、友だちをつくれたりするところ。」等の意見が示された。

他に見られた施設としては、「図書館」(B・D)、「体育館」(B)・「運動施設」(D)が共通していた。「その他」の内容としてはBグループでは「室内で座っておしゃべりできるところがあるといい(雨宿りもかねて)。」、Cグループでは「駐輪場を充実してほしい。」といった意見が見られた。

つまり、「こんな施設があったらいいな」に関する意見集約を見ると、その意見の多くが特に目的を定めない空間に寄せられていることがわかる。建設計画において参考になる共通した意見と言える。

次に「こんなふうに運営・利用しよう」については、施設に対する期待だけではなく、その維持・管理までを含めた主体として高校生たちに何ができるのかということを検討してもらうよう配慮した。その結果、各グループでまとめられた意見を横断的に見ると、「マナー、ルールを守って」(A)、「許可証を発行」(B)、「館内規則をつくる」(C)といった、模範的な意見が集約された。従来の施設であれば与えられた規則等を遵守することを要求される高校生が、逆に規則等を設定する立場に立たされた際の反応として興味深い。

表-6 グループ討論で集約された意見の骨子

テーマ	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
こんな施設があったらいいな	1 自由にできる空間 2 NHKのスタジオ 3 外で遊べる場所	1 広場 2 図書館 3 体育館 4 その他	1 話し合いができる場所 2 広くて干渉されないスペース 3 奇抜なデザインの建物 4 その他	1 自由な空間 2 図書館 3 運動施設 4 その他
こんなふうに運営・利用しよう	1 休日も使えるように 2 フロアごとに特色をつける 3 マナー、ルールを守って	1 許可証を発行 2 自習しやすいように 3 夜遅くまでの利用 4 その他	1 館内規則をつくる 2 自主企画・自主運営 3 遅くまで使えるように 4 その他	1 高校生が運営に参加 2 利用方法 3 目安箱

一方、グループ討論の過程で、この施設が想定している自主的・自立的な高校生たちの施設に対する意見が集約されたことも注目される。Cグループからは「自主企画・自主運営」として、「さまざまなイベントやライブ活動など自分たちで企画を立てて自分たちで運営したい。」「各学校から代表者が集まって、話し合いをして決める。」という意見が聞かれた。またDグループからは「高校生が運営に参加」として、「実務は時間的に無理なので、主に企画に参加する。」「各学校に部活動として、例えば『施設運営部』をつくり、当番制にして放課後や休日など実務に参加する（強制的な参加ではなく、あくまでも希望者がやるべきということと部活動とする）。」という意見が聞かれた。

以上の二つのテーマに即したグループ討論をふまえ、フロア全体としては施設への期待を意見として発言を行っていくことが重要であることを確認した。そして、発言した意見の実現を他人任せとするのではなく、施設であればその後の維持・管理なども含めて発言を行った一人ひとりが自主的・自立的に関係していく必要があることを確認した。

4 高校生たちが学習したことと建設計画

4.1. 高校生たちの感想に見る学習効果

これまでに見たように高校生フォーラムは主に、「自分の一週間を見つめてみよう」と題した生活実態把握と、「こんな施設があったらいいな」「こんなふうに運営・利用しよう」という二つのテーマに即したグループ討論とにより構成された。3において確認したように、それぞれのワークショップをとおして、建設計画への反映も期待できる意見等が得られた。

しかし、参加者である高校生たちは、この一連のワークショップをとおして、果たして施設に係る主体としての意識・態度といったことまでを学習することができたのであろうか。ここでは高校生フォーラムの最後に参加者に回答を依頼した感想から検討しよう。その概要は表-7に示される。

ここでは18名から回答が寄せられたが、学年・性別ごとに2名ずつの感想を整理した。この感想を概観すると、大きくは二つの内容を読みとることができる。一つは施設に対する期待である。そしてもう一つはこの高校生フォーラムに対する感想である。

まず前者に類する感想としては、「高校生・中学生等にこだわるのではなく（中略）お年寄りまで使える」

表-7 高校生たちの感想の概要

- 3年男子：高校生・中学生等にこだわるのではなく、5～6才の子供から70～80才のお年寄りまで使えるようにするとよい。運営は市民にまかせる。
- 3年男子：いろいろな話し合いができて楽しかった。僕たちの意見が今後どのように反映されるのか、今から楽しみだ。
- 3年女子：今はあまり楽しめる（くつろげる）場所がないから、この施設をとおして福島が楽しく明るくなればいい。ある一定の人たちだけでなく、いろいろな人が来られる場所になればいい。
- 3年女子：いろいろな話をしてたくさんの意見も出たので、今日のことを無駄にしないで必ず実行してほしいと思います。
- 2年男子：この話し合いで出た意見をたくさん取り入れて、他に類のない新しいスタイルの建物にしてほしいと思います。
- 2年男子：学校が閉まってからや休日などに話し合える場所がなくお店などを利用していたので、いすや机があって、話し合いができるスペースを是非つくってください。
- 2年女子：みなが集まって話していただける広い空間。子供と大人と一緒に遊べる場所など、自由に交流できるスペースがあってもいいのですが、フロアごとに特色をつけて分かれるようにする。
- 2年女子：日常生活から施設についての考えが出てくるので、もう一度ふり返ってみることが大切だと思った。
- 1年男子：直接自分たちが利用できる施設は、やっぱり必要だと思う。そういう点で、今日の話し合いはとても有意義だった。運営などの細かい点で問題は出てくると思うが、がんばってほしい。
- 1年男子：教育とか学習という分野を離れて利用できるような感じにすれば、人が集まるのでは。
- 1年女子：今までにない、本当の意味で使える施設ができるといい。運営も自分たちで責任をとってやっていけたら、自立につながる。いろいろな意見が聞けてよかった。
- 1年女子：いろいろな高校生が集まって話し合いをして、たくさんの意見が出たし、楽しかった。福島の子供がたくさん遊べる場所ができるといいなあと思いました。

（3年男子）、「ある一定の人たちだけでなく、いろいろな人が来られる場所になればいい」（3年女子）、「みなが集まって話していただける広い空間」（2年女子）等のこの施設を幅の広い年代に開放された空間にすべきとする意見が見られた。また、「学校が閉まってから休日などに（中略）話し合いができるスペースを是

非つくってください」(2年男子)、「直接自分たちが利用できる施設は、やっぱり必要だと思う」(1年男子)といった直接自分自身の利用と関係する視点からの意見も聞かれた。

こうした施設に対する意見の特徴としては、やはり建設計画に対する期待の範囲を超えることへのためらいが見られる。それだけに意見としても表現が「今から楽しみだ」「になればいい」「してほしいと思います」「つくってください」「がんばってほしい」等の期待の範囲にとどまる内容になっている。高校生たちに施設建設に対する責任を持った発言を期待することはまったく必要のないことである。だが、その一方で高校生たちの意見が施設建設に反映されるという実感が伴わないことも、住民といった主体による空間創造を展望する際には問題が残る。

次に後者の高校生フォーラムに対する感想を見ると、「いろいろな話し合いができてよかった」(3年男子)、「いろいろな高校生が集まって話し合いをして、たくさん意見が出たし、楽しかった」(1年女子)、といったワークショップにより意見交換が促進されたことに対する評価が聞かれた。

また、注目すべきは施設の維持・管理等をめぐる自主的・自立的なとりくみにつながる感想が聞かれたことである。例えば、「運営も自分たちで責任をとってやっていけたら、自立につながる」(1年女子)等の意見である。こうした意見はこの高校生フォーラムでの議論をふまえてのものであり、施設等に対して獲得すべき主体としての意識・態度の学習効果を一定程度見ることができる意見と言える。しかし、こうした意見がまだわずかにとどまることも確かである。

4.2. 建設計画への意見の反映

子供の夢を育む施設建設計画をめぐり、女性委員会が実践した高校生アンケート・高校生フォーラムという一連のプログラムは、高校生の生活実態把握・意見集約という目的を達成することができた。その結果は2001年10月に報告書⁷⁾としてすでにまとめられており、これが2.2.で述べた提言として同月に福島市に提出された。それではこの提言は何らかのかたちで建設計画に反映されたのであろうか。この点を2002年2月、福島市建築課に聞き取り調査により確認した。

すると報告書自体はすでに提出されていたが、その提出時期が市長選挙と重なったこともあり、内容を吟味するに至っていなかったとの回答を得た。しかし福

島市では、本稿を投稿する直後である2002年2月18日に女性委員会・高校生と市長との懇談会を行うとのことであった。ここで提言を聞くと同時に、高校生からもさらに意見を聞きたいとのことであった。

またこの懇談会の結果と報告書は、2002年1月に決定した設計担当企業が行う基本設計にも反映させるようにしたいとのことであった。そして基本設計において再度ワークショップを開催するなどして、高校生など子供たちの意見集約に努めたいとの回答を得た。

つまり本稿を投稿する段階で、結果がどのように建設計画に反映されたのかということは、施設の構成などに立ち入っては言及できない。だが市長との懇談会の実施や基本設計での再度のワークショップの実践などに継続されるという点で、主体としての高校生たちの意見を反映させる役割を果たしたと見るべきである。

5 ワークショップの評価とその公共施設建設計画への適用の可能性

5.1. ワークショップが参画と学習に果たした役割

本稿では高校生フォーラムの実践をとおして、ワークショップによる公共施設建設計画への住民参画について検討してきた。そしてその過程では公共施設等に関係する主体として獲得すべき意識・態度をワークショップにおいて学習することの必要を念頭に置いてきた。具体的に女性委員会が高校生フォーラムにおいて獲得を試みた事項は、高校生たちの生活実態把握・意見集約にあった。まず前者については高校生アンケートと対をなすかたちで把握することができた。そのなかでは高校生たちが持っている学校以外の生活の場所や、とりわけ公共施設をそうした場所としている高校生の存在なども確認することができた。

そして施設に対する意見集約については、高校生フォーラムをとおして、高校生たちが特に目的を定めない空間を期待していることなどが把握できた。これまでの児童施設が行政によりあてがうという性格を持つものであったとすれば、このワークショップで把握された高校生たちの意見は建設計画に示唆を与えよう。また、完成以後の維持・管理をめぐる模範的な回答に終始してしまっただけという性格を持つものもあるが、自主的・自立的な企画・運営まで討論を展開させたグループもあった。ここから導かれる今後の課題は、子供の夢を育む施設の基本構想も想定したこうした自主的・自立的なとりくみの萌芽を、具体的にどのように建設計画から

その完成以後に結びつけるのかという方向づけである。このワークショップでは建設計画への参画と学習という点に重きを置いたが、それ以後への展開も見据えたプログラムづくりが必要であった。

さらに4.2.に紹介したように、高校生フォーラムの結果も含めた女性委員会の報告書は提言として今後、この施設の基本設計等に反映される予定にある。それが果たしてどのように建設計画として具体化するのかという点を皮切りに、今後なお注目する必要がある。

5.2. 空間創造主体形成への可能性

高校生たちが学習した意識・態度の一端は4.1.の感想として示したとおりである。そのなかではなお、施設建設に対して期待の範囲にとどまる意見が多く見られたことを整理した。高校生たちが施設建設に対して責任を負うことまでを問うという意味ではなく、この点については実感を持って建設計画に発言をできるのかどうかという意味が問われるべきである。高校生フォーラムの実践をめぐっても、この点については特にプログラムとして配慮をしていなかった。建設の主体となる福島市との連携による実践ということも視野に入れつつ、今後の課題とすべきである。

また個々の感想からは自主的・自立的にこの施設と関係することを意識した意見は散見されたものの、なお少数であった。ワークショップのねらいとして、そうした意識・態度を注入することは論外である。しかし、その意識・態度をめぐる議論は今後の空間創造主体形成という点ではテーマとして正面から扱われてもよかった。この施設建設に限定しての議論は深まったが、広く公共施設あるいは地域を見据える視点として、なお学習を深めるプログラムを用意する必要がある。

6 おわりに

本稿では福島市における子供の夢を育む施設建設計画をめぐり高校生フォーラムを事例として、ワークショップによるそれへの住民参画について検討した。特に高校生を対象として検討したが、施設への自主的・自立的な関係づけの萌芽など、今後さらに展開すべき課題が示された。今後も他のワークショップ等をとおり、実践的に検討を継続していきたい。

謝辞

本稿は女性委員会をはじめとするスタッフ、そして

参加された高校生のみなさんとの共同によりまとめることができました。記して感謝いたします。

補注

- (1) 「建築と子供たちチャレンジ講座」は福島県建築士会福島支部女性委員会が2000年度から実施している、子供に地域・建築への関心を持ってもらうことをねらいとした事業である。高校生フォーラムはその第2回として実施された。第1回については2000年度に福島市中心市街地を対象とした「まち歩き」の実践を行っている(引用文献8))。
- (2) 問題関心を抱いた集団などにメンバーとして参加しながら観察を行う社会調査方法の一つ。ここでの観察項目は主として高校生たちの生活実態と施設への意見をめぐり、ワークショップでの発言・行動の把握に重きを置いた。
- (3) 目的・用途・建設主体の異なる公共施設を一棟あるいは一体に建設する方法。
- (4) 基本構想に関する記述は、ワークショップの企画にあたり福島市より提供を受けた資料による。

引用文献

- 1) 西山卯三(1968),『地域空間論』,勁草書房 p. 169-181
- 2) 松下圭一(1971),『都市政策を考える』,岩波書店 p. 122-141
- 3) 建設省(2000),『平成11年版 建設白書』, p. 117-121
- 4) 中野民夫(2001),『ワークショップ』,岩波書店 p. 26-34
- 5) 龍元・清水裕之・大月淳・杉本宗之(2000),「公共文化施設建設における参加型設計プロセスに関する研究」,日本建築学会計画系論文集第536号 p. 133-140
- 6) 倉原宗孝・後藤由紀・日景敏也(1996),「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」,日本建築学会計画系論文集第483号 p. 179-188
- 7) 福島県建築士会福島支部女性委員会編集・発行(2002),『建築とチャレンジ講座 PART.2』
- 8) 福島県建築士会福島支部女性委員会編集・発行(2001),『建築とチャレンジ講座 PART.1』